慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題(其の二) : ソシオメトリー研究のその後の発展(年代的発展の傾向)
Sub Title	The developement of sociometry and its current problems (II) : the chronological developement of sociometry
Author	佐野, 勝男(Sano, Katsuo) 関本, 昌秀(Sekimoto, Masahide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1959
Jtitle	哲學 No.36 (1959. 7) ,p.31- 66
JaLC DOI	
Abstract	The system of Moreno's sociometry has been disjointed with times against the will of Moreno. One can find some justifiable reasons for it. The development and differentiation of sociometry can be reviewed at least from two points of view; the chronological development and the development of each branch within the sociometric system. The former is discussed in the present paper. The development of sociometry is chronologically divided into three parts as follows. (1) Hot sociometry period (1923-1937): The practical aspect of sociometry was emphasized more that the theoritical one during this period. Research was only a by-product in the process of therapy. the goal of sociometric study was to change the conflicting society and group into healthy ones with sociometric procedures. (2) Cold sociometry period (1937-1950): The sociometry of this period aimed at describing, measuring and estimating the group structure and interpersonal relationship within it and refining sociometric techniques. Emphasis had shipted from therapy to diagnosis. the system of Moreno's sociometry was differentiated with this shift and each branch within the system developed separately. (3) Perceptual sociometry period (1950-) Introversion of sociometric test, that is, awareness of other person's choice is the major subject at present. The psychological dynamics of choice behavior is being definitely shown by the researches of these kinds.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000036-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（其の二）

――ソシオメトリー研究のその後の発展（年代的発展の傾向）――

佐野勝男
関本昌秀

三　ソシオメトリー研究のその後の発展
㈠　モレノのソシオメトリー体系の解体
㈡　ソシオメトリー研究の年代的発展傾向
(1)　ホット・ソシオメトリー
(2)　コールド・ソシオメトリー
(3)　知覚的ソシオメトリー

三　ソシオメトリー研究のその後の発展

㈠　モレノのソシオメトリー体系の解体

前二節において指摘したごとく、モレノのソシメトリーなるものは、今日一般に考えられているように、集団内の人間関係や集団構造を科学的数量的に測定するための単なる調査技術ではなく、人間のもつ自発力と創造力に対

する深厚なる哲学的宗教的信念と、それらの力を制度や文化の束縛から解放することによつて、より自由平等な、より生産的な、より住みよい理想社会を建設しようとする社会改造への情熱とにもとずいて築き上げられた実践的要素の強い一つの学問体系であり、それはかかる実践的目標に照し合せて産み出された相互関連的な諸理論と諸技術から構成された一連の雄大な体系であつた。したがつて、彼のソシオメトリー理論の中には、人間生活に関する空論的思弁的命題と具体的人間集団の調査結果にもとずいた実証的命題とが共存しており、同時にまた、その諸技術の中には、集団または個人の行動にかかわる諸問題に対して、厳密な科学的アプローチを可能ならしめるための調査技術と、それらの諸問題を実践的立場から治療し解決するための社会治療の技術とがともに包含されていた。いいかえるならば、モレノのソシオメトリーにおいては、哲学、科学、治療の三者が、彼一流の論理によつて言葉巧みに織りなされ、一つの体系を成していた。かかる統括性が実践科学としてのソシオメトリーの強味であると同時にまた弱味でもあつた。世に出るにつれ、モレノのソシオメトリーはさまざまな立場に立つ学者達からさまざまな酷評を受けた。あるものは彼の人間生活に関する抒情詩的思弁的論述をとらえて、価値判断の除去を主張する科学とは両立し難き夢想と酷評し、あるものはその数量的処理の厳密性をとらえて、数字の操作や図表の作製によつて人間社会（集団）の真の実態は解明できないとこきおろし、またあるものは病める人間性を、さらに進んで、病める全世界を単純な一連の技術によつて治療してゆこうとする彼の情熱をとらえて、誇大妄想的欲求と嘲笑つた。一方これとは逆に、あるものはその哲学的詩的流れに興味を覚え、それによつて彼等の渇ききつた喉を潤し、あるものはその数量的操作による人間社会の解明を学史上まれに見る偉大なる科学的貢献と激賞し、またあるものはそのユニークな一連の治療技術を精神治療学上の大きな進歩と称讃した。

だが、彼のソシオメトリーに与えられたこれらの称讃なり批判なりは、いずれをみても、モレノのソシオメトリー体系内のただ一つの一側面に向けられた称讃ならびに批判であつて、体系それ自体を総括的に批評したものではなかつた。しかもそれは、一方において厳しく批判されている側面が、他方においては激しく称讃を受けるといつたように相矛盾した様相を呈していた。この事実はとりもなおさずソシオメトリーの今日の発展状況を簡明に物語つている。かつてネーネヴァイアが「科学者であり、詩人であり、哲学者であり、治療家であるヤコブ・L・モレノは彼みづからこれらのあらゆる方向（哲学的、科学的、治療的方向……著者註）にそつて、その領域（ソシオメトリーの領域……著者註）の開発に着手し、それを押し進めてきた。……おそらくモレノは、木を求めて森を失わず、森を求めて木を失わぬただ一人の人であつたろう」[1]と評したように、ソシオメトリーの誕生期においては、モレノによつてこれらすべての側面が巧みに組織だてられ、その科学的成果の善し悪しは別として、当時のソシオメトリー研究は一連の体系の流れに準じて執り行われていた。[2]ところがその後、彼のソシオメトリーに注目し、彼につずいてこの方面の研究に従事してきた研究者のほとんどは、彼の体系を見落し、あるいは否定し、各自がおのれの興味に従つて体系内の各側面を個個ばらばらに発展させていつた。そして今日においては、ついにその背後にこのような体系が存在していたということすら気づかれないほどまでに専門化が徹底してしまつた。しかし、モレノの意に反し、ソシオメトリーがかような発展過程を辿つていつたということにはそれなりの理由が考えられる。

まず第一に、ソシオメトリーに注目した人人の興味の焦点が各自違つていたということがあげられる。ソシオメトリーの存在を知り、その新奇性と有用性に心をひかれた研究者のほとんどが白紙の立場に立つ人達ではなく、そ

れ以前に、哲学者として、社会学者として、心理学者として、教育学者として、あるいは精神治療家として、またそれらの学問内のさらに専門化した分野における学究者として、すでに独自の仕事に従事していた人人であつた。したがつて、これらの研究者はみずから白紙の立場に立ちかえつて、ソシオメトリーの体系を総括的に眺めるというよりは、おのれの興味をそそり、おのれの研究分野にとつて利用価値があるとみられる側面のみを摂取し、それを彼等の研究分野に適合する形において発展させていつた。第二の理由として、モレノが、ソシオメトリー体系の背後にあり、体系内の各側面に相互関連性を与えるものと信じていた彼の理論そのものが、あまりにも宗教的倫理的色彩が強かつたということがあげられる。近年モレノは「誰が生き残るか」の改訂版（一九五三年）において、わざわざ数十頁にわたり「序幕（Prelude）」[3]と称する部門を設け、そこにおいて、彼の着想がいかなるところから湧き出て、それがいかに成長していつたか、また彼の抱く価値体系と彼の社会科学的思想体系との間にはどのような関係があるかについて詳しい論述を行つているが、この部分は彼の理論がいかに宗教的倫理的色彩を帯びていたかを知るうえにもつとも好適な材料を提供してくれている。要するに、彼がこの部分において力説したことは、科学的思考や科学的技術にもとずいてつくられたいかなる命題の中にも本来倫理的思慮がそなわつており、かつ、われわれが他のいかなる基盤の上にも倫理性を認めることができると同じように、科学的基盤の上にもまた倫理性を認めることが可能であるということであつた。このように、ソシオメトリー体系の接着剤としての理論たるものが幾多の科学的研究の成果にもとずいて築き上げられた理論ではなく、「偉大なる販売術を身につけた創作的天才」[4]によつて、アプリオリに構成された宗教的臭の強い難解な理論であつたということが、科学から倫理性を除去しようと志す数多くの研究者をしてその理論から全くそつぽを向かせてしまつた。このような事実にもとずいて、彼の理論も全く

接着剤としての効力を失い、時のたつにつれ、その体系も個個ばらばらなものに解体していつてしまつた。第三に考えられることは、分化という現象が科学の進歩にとつて必要欠くべからざる過程であるという事実である。いまかりに、ソシオメトリー体系の接着剤としての役割を担つているモレノの理論が肯定され、体系内の各側面の相互関連性が多くの研究者達によつて認められたとしても、誕生以来三十余年を経てきたソシオメトリーの領域に、はつきりした分化がみられてもそれは決して不思議なことではない。いかなる科学においても、時間の経過につれて研究資料が豊富に集積され、それにともなつて理論体系の拡張が行われ、方法論的技術的側面が進歩するにつれ、そこにおのずと分化が生じてくることは当然なことであり、このことは、その領域の進歩発展にとつてむしろ望ましいことでもある。だがここで一考しなければならないことは、この分化が体系の相互関連性を全く失つてしまうような分化に終つてしまつてはならないということである。それは統合を前提とする分化でなければならない。この点、現在のソシオメトリーの発達状況は決して好ましい方向を辿つているとはいえない。統合性、それにともなう実践性という面だけからみれば、モレノによる初期のソシオメトリー研究の方が現在のソシオメトリー研究よりも遙かに優れた点をそなえていたといえるだろう。第四に、それは一見最も単純にみえながら、実はかなり重要な理由に思えるが、モレノのソシオメトリーの体系がもつ統合性とその重要性とを充分研究者に納得させるに足るだけの統括的な著作が、一九五〇年代に至るまでほとんど現れなかつたということがあげられる。もちろん、このことは、一九五〇年代にいたるまで、モレノの著作に彼のソシオメトリーの基本考想を論じたものが全くみられなかつたということを意味するのではない。事実はそれでころか、メイヤーが「ソシオメトリーの基本的妥当性とそれが人類に寄与するように適用されることの絶対的必要性を、あらゆる人人に確信させるための絶え間ない説得戦争」(5)

と評したように、モレノは「ソシオメトリー」やその他の著作を通じて、幾多の学者からおのれに向けられた批判に対し、やつきとなつて応答し、その度ごとにソシオメトリー体系の統合性を唱えていた。しかしそれらの著述は難解であるばかりか、きわめて断片的で、ソシオメトリーに関心を抱く研究者達を心から説得させるだけの力をもたなかつた。一九五一年に、ソシオメトリーの方法論と調査に焦点を合せて編集された「ソシオメトリー、実験方法および社会に関する科学（Sociometry, experimental method and the science of society）」が出版され、ここにおいて彼の価値観、社会科学的思想、ソシオメトリーの考想、それにともなう実験的方法ならびに調査の一部が一括して紹介されたが、それとても過去に印刷された諸論文の単なる寄せ集めに過ぎず、ソシオメトリーの現在の発達段階に立つて、これを体系的に整理し新しい論述をこころみたものではなかつた。したがつて、それらの論文の中には年代的、その場その場的ずれからくる幾多の矛盾がうかがわれ、ある意味ではいつそうソシオメトリー体系なるものを解し難いものにしてしまつていた。その点では一九五三年に出版された「誰が生き残るか」の改訂版の方がこの著作よりは多少よく整理されているように思える。

さて、以上において、モレノのソシオメトリー体系が、時代の発展とともに解体し、今日においては各側面が全く独立的な源泉から発達した領域であるかのような印象を与えるまでに分化してしまつたという事実と、またモレノ防戦にもかかわらずソシオメトリーがそのような分化の方向を辿るに至つた理由のいくつかについてこく皮相的にふれてきたが、つぎに、さらに少し深く立入つてその分化の内容についてふれてみよう。

（1）Nehnevajsa, J.　Sociometry: decades of growth. *Sociometry*, 1955, 18, p. 305.

（2）佐野勝男、関本昌秀、「ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題（その一）――モレノのソシオメトリーの背後にあ

るもの」哲学第三十五集　慶応義塾創立百年記念論文集　昭和三十三年　五〇九――五三四頁

(3) Moreno, J. L., Who shall survive? (revised), 1953, pp. xiii～cviii

(4) Loomis, C. P. & Pepinsky, H. B., Sociometry, 1937～1947: Theory and method. *Sociometry*, 1948, 11, p. 262.

(5) Meyer, H. J. The sociometries of Dr. Moreno. *Sociometry*, 1952, 15, pp. 354.

(二) ソシオメトリー研究の年代的発展傾向

ソシオメトリー研究の発展とそれに伴うソシオメトリー体系の分化傾向を検討しようとする場合、少なくとも次の二つの観点からこれを眺めることが可能であろう。一つは年代的発展の面からの検討であり、いま一つは部門別発展の面からの検討である。年代的発展については、たまたま一九五四年に、モレノ自身がソシオメトリーの発達過程を"hot" sociometry（一九二三―一九三七年）、"cold" sociometry（一九三七―一九五〇年）、"perceptual" sociometry（一九五〇年以後）の三時代に分類し、それについて簡単な説明を加えているので、[1] 以下これを参照しながら年代的発展過程を眺めてみよう。

(1) Hot sociometry　これは別名「革名的ソシオメトリー（revolutionary sociometry）」[2] とか「治療的ソシオメトリー（therapeutic sociometry）」[3] と呼ばれるように、その目的とするところは、ソシオメトリー的方法やそれと同類系の諸方法を利用することによって、社会的葛藤や社会問題を擁している不健康な社会や集団を――それがたとえ open community であっても――健康な社会や集団に改変させることにあり、また諸個人や諸集団の単なる寄せ集めの状態から新しい健全な社会あるいはコミュニティーを創り上げたりすることにあった。いうなれ

ば、この初期の時代のソシオメトリーは、社会、集団、そしてそれに所属する諸個人の治療改善というきわめて実践的な面にその主要目的がおかれ、ソシオメトリー調査それ自体は、このような治療過程における副産物に過ぎなかつた。だが、この時代のソシオメトリー研究がかような実践的目標に向つて押し進められていたといつても、全般的にみて、それは単に社会変動（コミュニティー、集団、集団成員をより安定した健全な状態に改変するという意味での）の問題に研究者の情熱が傾けられていたというだけの軽い意味であつて、その変動が前節に述べたようなソシオメトリーの体系に準じて科学的に取扱われていたとはお世辞にも言えない。モレノは、革命的ソシオメトリーの時代には集団の全成員についてのソシオグラムや動きのダイヤグラムやロールダイヤグラムなどをもとにした集団に関する公開相談、コミュニティーの不均衡を治療するための集団の編成替え、役割演技などの諸技術がおおいに用いられたといつているが、[4]これらの技術が果してどの程度彼の体系にのつとつて互に密接な関連をもちながら使用されていたかは疑問である。事実、「誰が生き残るか」（一九五三年改訂版）の中で序幕（preludes）と名付けられている部分ならびに巻末の文献録から推察しうるところでは、一九二〇年代のモレノは、まだまだ精神医学者の域から脱しきれず、その研究の多くは、心理劇や役割演戯の方法を用いてごく小さな集団やその集団内の個人を臨床的に取扱うといつた程度のものに過ぎなかつたようである。いいかえるならば、革命的ソシオメトリー時代前半における彼の研究活動は、おもに「ソシアトリー（sociatry）」の領域において遂行されていたといえるだろう。一九三〇年代に入つてモレノの関心は集団を通しての（あるいは集団を用いての）個人の治療ということから、だんだん集団それ自体の診断治療ということに向けられていつたようである。それにともなつて、用いられる技術も心理劇、社会劇、役割演戯などのような個人の治療に重点を置いた技術から、ソシオメトリック・テストや社会的割

振り（social assignment）のような集団の治療に重点を置いた技術に変つていつた。つまり、狭義の「ソシオメトリー」の領域における本格的な活動は、彼が革命的ソシオメトリー時代と名付けた時代の後半からおこなわれたとみてよいだろう。だがもちろん、この時代のソシオメトリー（狭義の）は、今日のように、集団構造の単なる測定技術あるいは診断技術といつた意義よりも、むしろ集団治療へ到達するために通らねばならぬ一過程といつた二次的な意義が与えられていた。[5] この事実は是非ともわれわれの心に留めておかなければならない。

この時代の代表的な研究としては、なんといつてもハドソン女子少年院における綜合的研究[6]と、集団構造の進化発展を扱つた学級集団の研究[7]とがあげられよう。前者は、ニューヨーク州内の裁判所から送られてきた非行少女に対し、数年間にわたつて訓練を施すことを目的とする施設を対象とした研究である。このコミュニティーはおよそ五、六百人の少女を収容する一六の宿舎と、ほかに教会、学校、病院、工業施設、洗濯場、農場などの設備を有する完全に閉鎖的なコミュニティーで、ここでは寮母が両親の役割を果し、食事などはすべて食事係の指導のもとに各宿舎において用意され、少女達は各自、給仕、台所の手伝人、コック、洗濯番、掃除番などの役目を当てがわれ、家事に参加していた。モレノは、一方においては、このコミュニティーをいかにしたら住みよく明るいコミュニティーにすることができるだろうかということに情熱を燃し、他方においては、このコミュニティーの綿密な研究を通して他のいかなるコミュニティーにも通用する科学的知識を獲得し、またおのれの研究過程において発案された諸方法や諸技術がどの程度の普遍性をもつて具体的な集団に適用しうるかを吟味するといつた目的をもつてこの研究に取組んだ。モレノが「コミュニティーを全体として（as a whole）テストし、このテストによつて発見された諸結果に基いてそのコミュニティーを再建することが本研究の目的である。この研究におけるわれわれの指導原理は、わ

れわれが未踏査の領域の研究を決意したそのはじめから、状況のおもむくままに調査の方向とその展開をまかせようということであつた。したがつてわれわれがとつた手続は前もつてあらかじめ用意されたものではなかつた」[8]と述べているように、この研究ははじめから厳密に立案された調査計画にのつとつて押し進められたものでなく、その場その場に応じて適切と思われる方法なり技術なりを適用しながら進められていつた。つまり、この研究においては一つのコミュニティーをいかに再建したらよいだろうかという実践的目標に向つて、さまざまな技術が自由にかつダイナミックに駆使されたといえるだろう。事実この研究はきわめて多元的なものであつた。そこではコミュニティーの内的中核構造（モレノによればこれは牽引――反撥――無関心の型相（パターン））を知るためのソシオメトリック・テストをはじめとし、そのテストの結果得られた中核構造をさらに浮彫りにするために知己テスト（単なる社会的接触の範囲を調査するテスト。このテストの結果とソシオメトリック・テストの結果を照合することによつて、牽引――反撥の選択の重みを知り、中核構造を浮彫りにする）ならびに動機テスト（牽引――反撥の選択の意味づけを行うためにその選択動機を調べるテスト）などが実施され、さらにまたソシオメトリック・テストによつてあきらかにされた内的中核構造と現実の場面においてとられている現実行動とのギャップをみる目的で、何人かのサンプルを選び出し、それを対象に自発性テスト、状況テスト、役割演戯テストなどが試みられている。だがこの研究はそれだけで終つてしまわなかつた。むしろ、これに続く治療的諸技術の適用の方がこの研究の本筋であり、革命的（治療的）ソシオメトリーと呼ばれるゆえんでもあつた。モレノは、四週間の間隔を置いて定期的に数回にわたつてソシオメトリックな分析を行い、それらの分析結果からみて、個人的治療法（individual treatment――個人個人に上述の調査結果を示しておのれの置かれた状況を知らせ、集団内の相互選択を増強する方法）、集団心理療法

(group psychotherapy —— 心理劇、社会劇のような方法)、役割演戯と役割訓練 (role playing and role training —— この場合の役割演戯は前述のような診断の方法としてでなく、集団成員間の関係を改良するための役割治療として用いる)、およびソシオメトリー的再構成 (sociometric reconstruction —— 調査結果をもとに所与の集団を生産的な集団に改造する) の四つの治療法が最も効果的であるとし、これを用いて、コミュニティーの改造を行わんとした。この治療技術の適用の後には、さらにまた調査が行われ、治療の効果が検討されている。このようにハドソン女子少年院の研究では調査と治療が巧に結びつけられ、一見彼の体系の適用が成功したかのようにみえるが、そこで実施されている調査はあくまでも治療のための調査、いいかえるならば診断的調査であつて、その調査から普遍的法則は生れてくるとは思えないし、このような研究の道を歩む限り、モレノがソシオメトリー運動の最終目標として考えているソシオノミー (社会法則の科学) への到達は難かしいように思える。事実、モレノはこの研究結果からいくつかの普遍法則を導き出しているが、それらのほとんどは普遍化を早まつた余りにも飛躍的な法則といつた感がまぬかれない。この点については批判のところでもう一度詳しくふれることにしよう。

さて、後者の研究、つまり集団構造の進化を扱つた発達的研究は、ソシオメトリック・テストを用いて、幼稚園の園児から第八学年児童にいたる各学年の児童が形成する学級構造を調査し、それによつて集団構造の年令的発達過程を探究しようとした研究である。この研究は前述のハドソン女子少年院における研究とは異つて、その主たる目的は調査それ自体にあり、調査後にたいした治療は行われなかつたようである。つまりこれは狭義のソシオメトリーの領域における研究であつた。ここにおいてもモレノは、わずかな調査結果から大胆な普遍化を行うという過ちを犯している。「社会発生的法則 (sociogenetic law)」あるいは「進化の集団理論 (group theory of evolution)」

と呼ばれるのがそれである。[9]

この時代の研究もやはり小集団を対象にしたものが圧倒的に多かつたが、中にはオープン・コミュニティーを扱つた研究もみられる。第一次世界大戦中オーストリア政府はイタリーからの避難民の救済策として、ウィーンに近いミッテルンドルフ(Mitterndorf)の近辺に収容所を設け彼等を収容した。モレノはこの新しいコミュニティーにおける公衆衛生担当の監督官に任命され、三年間(一九一五——一九一七年)をそこで過した。この間彼は一つのコミュニティーがその誕生期からどのように成長してゆくか、そしてそこに住む住民達が国籍、政治意識、性などの違いによつて、どのように異つた心理的傾向を表わすかについて深い経験を積んだ。[10]この経験をもととし、彼はコミュニティーのソシオメトリー的設計という問題に取組み、一九三六年にはコミュニティーのソシオメトリー的改善に関する設計図ともいうべき論文を発表した。[11]その論文の中で彼は従来の移民があまりにも無情な立案者によつて計画され、移民当事者の個々の自発性が全く無視されており、このことがコミュニティーの健全な発達をかなり阻害してきたと述べ、ソシオメトリック・テストを用いてこの弊害を除去することを主張した。彼によれば、いまおたがいに遠隔の地にあるA・B・Cの三村落から集団的に移民を募つて新しいコミュニティーを作る場合、(1)各村落ごとに、どの家族と一緒に住みたいかについてソシオメトリック・テストを実施する。(2)その結果からそれ自体がしつかりまとまつており、かつ、リーダーを通して他のサブ・グループとも密接な関係を保つている比較的大きなサブ・グループをいくつかぬき出す。(3)各村落のサブ・グループのリーダーを一堂に集めて数回の会合を持ち、機の熟するのをみてリーダー同志のソシオメトリックな反応を調べる。(4)以上のような手続によつて得られた結果を綜合的に分析し、移民の割当を決定するといつた順序に従つて移民計画が押し進められてゆくのが理想的で

ある。また、移民の応募者が上の例のように各村落ごとにまとまつて居住しておらず、全国的に散らばつているような場合には、(1) 一定の地域ごとに移民希望家族の世帯主を集めて数回の会合を開く。(2) その会合の過程に生れてくる潜在的リーダーをソシオメトリック・テストによつて発見する。(3) このようにして発見された各地域のリーダーを再び一緒に集めて数回の会合をもち、リーダーのソシオメトリックな反応を調べる。(4) その結果を綜合的に分析し、移民計画をたてることを提案している。

以上はモレノによつて提案された新しいコミュニティー設定に関するソシオメトリー的設計図である。この論文自体は単に設計図を示したに過ぎなかつたが、その翌年の一九三七年にはウォールマン (S. Wolman) がモレノのソシオメトリー的考想を生かし、実際に新しいコミュニティーの建設計画に携わつた。[12] この計画は都会に住む貧しい階級の人々を「センタービリ (Centerville)」と称する地域に集団入植させる計画であつた。まず、(1) 入植希望者を一度におよそ十五家族づつ集めてしばしば会合を開いた。ときには家族全員を参加させた。この会合に参加した家族は全部で百九十八家族であつた。(2) 一九三六年七月に最初の三十五世帯分の家屋が出来上つたので、応募者の中から三十五家族（百五十四人）が選ばれた。この人選は新しいコミュニティーの工場運営にとつての必要性という規準から選ばれた。これらの家族は入植計画の始まる以前にはほとんどが面識がなかつたが、前述の集会に参加することによつて互に知己の仲となつた（この三十五家族が結局彼の調査対象となつた）。(3) この団地の家屋の配列は、六軒からなるブロックが五つ、五軒からなるブロックが一つという具合に出来上つていた。そこで三十五家族に対する家屋の割当は、誰の近くに住みたいかという規準によるソシオメトリック・テストの結果を参考にして行われた。このテストは民主的な選択法として入植者達に歓迎された。なおこのテストの実施に当つては、家族

全員の意思を代表するような選択を行うよう重ねて要請した。(4)家屋の割当が終つてから、入植者同志で家屋を交換することを許したが、一つとしてそのような例はみられなかつた。(5)入植後六ヶ月経過したとき、その間このコミュニティーにどんな変化が起つたか、すなわち、居住者の人間関係は進歩したか、退化したか、あるいは相変らずかを調べる目的で再調査が行われた。データーのほとんどは入植者とのインフォーマルな会話を通して集められた。(6)その結果から選択数も相互選択の数も増え、入植直前誰からも選ばれていなかつた家族のいくつかが集団の中へ統合されていた。また、とくに潜在的リーダーと思われている人々への選択が増え、それらのリーダーの結びつきによつて集団としてのまとまりがしつかりしてきたということがあきらかとなつた。つまり、ソシオメトリックな家屋割当が一応成功をおさめたといえる。

以上において、ホット・ソシオメトリー時代におけるソシオメトリー研究の特徴とその代表的研究のいくつかをごく簡単に紹介した。このようにこの時代のソシオメトリー研究は、個個の集団が直面する現実の問題に直向から立向い、さまざまなソシオメトリー的諸技術を巧みに適用することによつて、この問題を治療解決することをその主たる目的としていた。したがつてこの時代の研究は事例研究(ケーススタディー)的色合が強かつた。すでに述べたように、モレノ自身がソシオメトリーを「分類科学(classificatory science)」と考え、また社会科学の領域における今日の研究は「検証的方法」よりもむしろ「発見的方法」に依存せねばならぬと主張していたことからすれば、このことはなんら問題を残さないが、やはり科学を、充分にコントロールされた体系的観察を通して、現象内の因果法則を発見し証明するものと考えている従来の社会科学者からすれば、このような個個ばらばらな研究結果からどのようにして普遍的な科学法則が生み出されてくるかは疑問であつた。一方、モレノがみずから分類科学的立場と発見的方法によ

る資料、知識の集積を強調しておきながら、おのれはわずかな調査資料から、独自の宗教観や倫理観の助けを借りて、一足飛びに抽象度の高い普遍法則（しかも自明の理のような普遍法則）を創作するといつた大胆な態度にでたことが、モレノ流のソシオメトリー研究に対する社会科学者の不信をさらにいつそう強めたようであつた。だが、このような理由でソシオメトリーそのものの価値が全く無視されてしまつたわけではなかつた。この新しい技術が集団構造ならびに集団内の個人の解明にとつて偉大な貢献を果す可能性をもつものであるということは衆人の認めるところであつた。かかる事態からソシオメトリーの技術を科学的立場から再整備し、それを用いて新しい方向の研究を進めてゆこうとする動きが出てきた。かくて一九四〇年代のソシオメトリーはモレノの考えていたような一つの学問体系としてよりも、むしろ科学的研究における一つの有効な技術としての発展をみた。これがモレノによつて「コールド・ソシオメトリー時代」と呼ばれている時代である。

(2) **Cold sociometry**　ソシオメトリーがその発展の過程において、かような時代を経ることはなかば当然なことであり、むしろ科学としてのソシオメトリーの確立のためには望ましいことであつた。モレノがこの時代のソシオメトリー研究を別名「診断的ソシオメトリー（diagnostic sociometry）」[13]と呼んでいるように、その中心目的は集団構造ならびに集団内の相互的人間関係を記述、測定、評価することであり、また、ソシオメトリーの諸技術をその任にたえるよう洗練することであつて、そこでは治療そのものの意義は全く軽視された。このような動きにともなつて必然的にソシオメトリー体系の分化が行われ、各部門が個々ばらばらに発達していつた。なかでも、衆人の関心は狭義のソシオメトリーの領域に集中し、ときにはさらに狭められてソシオメトリーをソシオメトリック・テストと同義に解する傾向が強く現れた。

われわれはソシオメトリーがかような時期に入つたことを既述のような理由からみて一応当然な成り行きであり、かつ好ましい傾向と考えるが、モレノ自身はかような傾向をあまり歓迎しなかつた。彼からすれば、この種のソシオメトリーは「中途半端なソシオメトリー（halfway sociometry）」[14]なのである。では、なぜそれが中途半端なのであろうか。モレノによれば人間関係の理論は人間集団を行為（action）の中に没入させることなくしては確立しえないし、ソシオメトリーの方法がねらつている中心目標はまさにこのような状況を導くことにあつた。つまり、先にも繰返し述べたごとく、[15]ソシオメトリック運動の最終目標は、文化や制度によつて規制される外的周辺的な社会構造が、諸個人の自発性に基いて形成される内的中核的人間関係の類型（パターン）に矛盾なく適合されるような社会を作ることである。だが集団（あるいは社会）の内的中核構造はなかなか社会的相互作用の表層には現れてこない。そこで、かような深層的構造が容易にみてとれるような状況を作りあげ、かかる状況のもとで、その構造に関するさまざまなソシオメトリー的事実を発見することが必要となつてくる。それには被調査者を物質や動物と同じように実験者の単なる操作の材料と考え、彼等を現実状況から遊離して実験者の頭の中で論理的に組立てられた人工的状況の中に押し込み、これを冷い目で観察し分析するといつた従来の実験科学的方法では不充分である。従来の実験的方法では科学のヴェールを身にまとつた偽りの事実は把み得ても、真の事実は把みえない。では真のソシオメトリー的事実はいかにして捕えられるか。まず、実験の対象たる集団の各成員を単なる生活体（organism）としてでなく、現実場面における行為者（actor in situ）として行動させることが必要である。つまり、集団内のあらゆる成員から最大限の自発性を引き出させ、彼等が自から進んで実験に参加するような状況を作り上げることである。そのためには集団の成員がその瞬間において直面している現実の社会状況内の重要な問題を研究対象としてとりあ

げ、それに立向う成員の行動を現実状況において繰り拡げられるままに観察し分析せねばならぬ。この場合実験者もみづからかかる社会状況の流れの中に飛び込み、その場所で被調査者と一緒になつて行為しながら、当面の問題を解決し易いように援助してやることが必要である。このような過程の中で観察され、収集され、分析された事実こそ現実集団の人間関係に関する真の事実であり、かかる事実に基いて築き上げられた理論こそ真の人間関係の理論である。ところが、近年のソシオメトリー研究をみると、上述のようなもつとも重要な要件がすつかり欠けてしまつている。被調査者は実験材料と化し、調査は調査者の利得のために行われる調査のための調査となり、質問紙や傍観者的観察がその主要な道具としてさかんに用いられ、被調査者はその調査結果からなんらの恩恵も蒙ることがない。このように、被調査者の自発性を欠いてしまつた調査からは果してどの程度信頼のおける事実が発見されるかは疑問である。モレノにすれば、こういう意味で、近年のソシオメトリー研究は中途半端なソシオメトリーであり、ニヤ・ソシオメトリー（near-sociometry）と呼ばれるにあたいするものである。

しかし、モレノはソシオメトリー研究の現代の風潮をソシオメトリー本来の姿ではないと再三再四強調しながらも、一方においては集団成員の自発性とソシオメトリー的自覚が低いため、また彼等が集団の変動と発展に全く無関心であるがため、本来の力動的ソシオメトリーをうまく集団に適用することができなくなり、じよじよに新しい方向のソシオメトリー研究が生れてきたとしてこれを認め、さらにまた一歩譲歩して、(1) ソシオメトリーの統計的研究家によつて真のソシオメトリック・テストで得られた結果と、ニヤ・ソシオメトリック・テストで得られた結果との間に有意義な関係が存在することが発見された。(2) 生徒達に愛され信頼されている先生が、彼等に向つていま自分が実施しようとしているテストが自分の研究にとつて重要な意義をもつものであるということを強く訴

えた場合、そこに得られる生徒達の反応は可成り信頼がおけるものと考えてよい。(3) ニャ・ソシオメトリーは革命的ソシオメトリーと違つて、手が込んでいないため、教育学、心理学、社会学、文化人類学、精神医学などあらゆる分野の学者によつて、さまざまな場面に手軽に適用された。そのため、小集団に関する研究が広範囲にわたつて流行し、それにともなつて、従来の諸技術が整備改善され、また新しい補助的技術が考案されるに至つたなどの理由から、現代のソシオメトリー研究の傾向を、少なくとも過渡期における傾向としてやむをえないと承認してしまつている。[16] では一体コールド・ソシオメトリー時代にみられるソシオメトリー研究の分化とその研究方向とはいかなるものであつたろうか。この点については後に述べる「ソシオメトリーの部門別発展傾向」とかなり重複するので、後節に譲ることとしよう。

(3) **Perceptual sociometry**　ソシオメトリーがホット・ソシオメトリー時代からコールド・ソシオメトリー時代に移行するにつれ、ソシオメトリー活動の中心領域はだんだん狭義のソシオメトリーの部門に狭められていつた。そして研究の主要目標は治療から診断へと変り、それにともない、集団構造ならびに集団内の相互的人間関係の診断調査を精密化し、妥当化するために、従来のソシオメトリー的測定技術にさまざまな改良や補足が加えられた。このような動きの一つの現れとして「ソシオメトリック・テストの内転 (introversion of the sociometric test)」[17] という考えが一九五〇年前後からソシオメトリストの間で盛になつてきた。この動きは、直接的にはモレノの認識的テレ (cognitive tele) に関する着想[18]とその理論的枠組から出発したものである。人はおのれのソシオグラムについてかなり正しい予測力をもつており、その変化についてもするどい直観的知覚を働かせるものである。また同時に彼はおのれの隣近の人人やおのれが好いている、あるいは嫌つている人人のソシオグラムについてもかなり正し

い予測を行うことができるという仮定がこの方向の研究の拠り所となつている。かくて今日のソシオメトリー研究においては、従来のソシオメトリー的選択のあとに「いま貴方はXという基準について貴方の選択—拒否の反応を示してくれました。では貴方はAやBやCが貴方に対してどんな反応を示していると思いますか。AやBやCは貴方を選択していますか、拒否していますか。」といった類の質問を加えておくことが習慣的になつてきた。そして、従来の選択構造とこの選択認知構造とを併用することによつて、集団の内的中核構造の分析や各成員の社会的アトムの分析はますますその妥当性と有用性を高めるに至つた。だがもちろん、他人の感情の認知というかのような問題はモレノによつてその理論的根拠がはじめて示され、一九五〇年近くになるまでまつたく実証的な研究が進められなかつたというわけではない。事実はそれどころか、他人の感情の認知、判断といつた問題を取扱つた実験的研究は、すでに十八世紀末の頃からダウイン（Darwin, C.）やピダリット（Piderit, T.）らによつて手をつけられ、一九二〇——三〇年代の頃にはかなり多くの実験的研究がなされていた。だがこれらの研究のほとんどは、他人の容貌、ポーズ、動作、声、筆蹟、写真、さし絵などから、その人の情緒（emotion……たとえば、その人が幸福か、驚いているか、怒つているか、恐れているか、うんざりしているかなど）やパーソナリティを判断させ、その判断がどの程度正確になされているか、またそのような判断を下すに至つた過程はどのようなものであるかについての実験的研究であつて、[19] 人間関係のソシオメトリー的事実に関する知覚的研究ではなかつた。この方面の研究は、やはり一九五〇年近くまで試みられなかつたようである。

では、知覚的ソシオメトリーの事実（他の成員がおこなう選択の認知）に関する代表的調査研究の中にはどんなものがみられるだろうか。まず、相手の選択を予測する質問を実際に調査に取り入れた草分けとしては、モーコー

ルの「フランス陸軍におけるソシオメトリー調査」[20]があげられる。この研究は三十五名のフランス将校を対象としたもので、その目的はソシオメトリーという道具が、兵隊の合理的な組分け、ならびに一つの集団としての軍隊の診断にとつてどの程度有効に利用しうるかを明らかにすることにあつた。この研究においてはさまざまなソシオメトリー的指数が観察されているが、その中でモーコールは、自分がみずから選んだ相手だけについて、彼等が自分に対してどんな感情を抱いているかを予測させ、その結果について多少分析を加えている。この場合、彼の関心は相手からの返送選択の認知(awareness of reciprocations)という狭い範囲に限られていた。しかし残念なことにこの研究は、知覚的ソシオメトリー的分析それ自体が主たる目的ではなく、その面の分析は研究全体からみてアクセサリー的な意義しかもたされていなかつた。このほかこれと同じ程度に知覚的ソシオメトリーを利用した初期の研究例としては、ウイリアムスとリーヴィットの海軍将校志願者の研究[21]、ランドバークとディクソンによる高等学校生徒の人種関係についての研究[22]などがみられる。

これら先人の研究は、知覚的ソシオメトリー研究の開拓にとつてわずかな貢献しか果し得なかつたが、その後一九五二年に、タギューリが、この選択認知の方法を「関係分析(relational analysis)」の名のもとに念入りに細工し、この分野の発展に大いに貢献した。[23]彼は、われわれが人間関係を分析する際には、各人の他者に対する反応と、おのれに向けられる他者の反応に関する各人の知覚という二つの要素からこれをみることが大切であるとし、一回の操作でこの両面に関する知識を獲得する方法と、その両面を同時に考慮に入れた分析法を示唆した。彼によれば、ある個人Sの他者に対するソシオメトリー的関係については、(a) Sが誰を選んだか (b) Sは、誰が自分を選ぶだろうと予想したか (c) 誰がSを選んだか (d) 誰が、Sが自分を選ぶだろうと予想したか (e) Sは誰を拒否したか

(f) Sは、誰が自分を拒否するだろうと予想したか　(g) 誰がSを拒否したか　(h) 誰が、Sが自分を拒否するだろうと予想したかの八つの面が考えられる。また、相手方OのSに対するソシオメトリー的関係についても同様に上述の八つの面が考えられる。したがつて、SとOとの間のソシオメトリー的関係はこれらの要素をさまざまに組合せたいずれかの結びつきをなすものである。[24] そこで彼は、各個人Sの他の諸成員Osに対するさまざまな関係を体系的に整理する一つの分析表を考案し、これを示した。さらに彼は、自分の考案した分析表は単に関係分析に関する複雑なデーターを整理したというだけでなく、そのほかにもいくつかの利点をそなえたものであるということを述べ、その利点として　(1) ある個人の他の集団諸成員に対する実際の関係ならびに知覚された関係に関してその個人の特性を記述することができる。(2) いく組かの仲間、あるいはサブ・グループ間の人間関係を体系的に分類しかつ分析することができる。(3) 集団成員をたがいに比較する体系的方法を与えてくれる。(4) 集団の凝集性(cohesion)を記述する方法を与えてくれる。(5) いろいろな型の結びつきの期待値からの逸脱に関する研究は、人間関係の感情的側面と知覚的側面における規則性を明らかにしてくれる。(6) この表示法は、おそらくこの種の問題に関する唯一の理論的、実証的分類法であるから、固有のもちあじをそなえた分類体系を与えるなどの諸点をあげている。

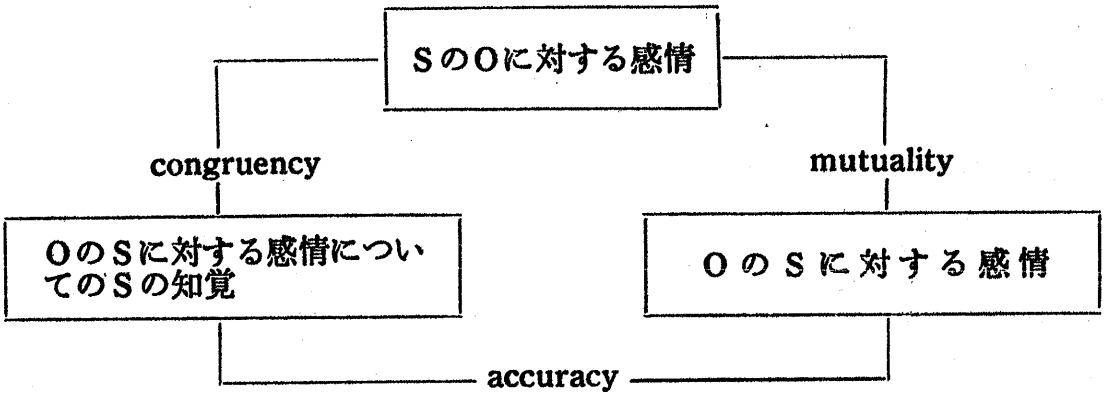
かように、タギューリは人間関係の分析にとつて、相手方の選択の予測ということがきわめて重要な要素であることを認め、まず最初に、この選択予想を従来の標準的選択法にうまく統合するようなかたちで取り入れ、それを分析する新しい方法を考案することから出発し、本格的に知覚的ソシオメトリーの分野の開拓にのり出していつた。関係分析の図式の提唱についで、彼はこの図式に示されたさまざまな関係から導きうる次の三つの主要な特性に目を向け、実験を通してこの特性の意義と、この特性相互間の関係とを明らかにしようとこころみた。[25] その特性とは

(1) **Mutuality** 二人の成員の間に流れる感情の類似性、すなわちある成員Sの他の成員Oに対する感情とOのSに対する感情の一致度、具体的にはSのOに対する選択（牽引、反撥、無関心）と、OのSに対する選択との一致度 (2) **Congruency** おのれに対する相手方の感情の知覚とおのれの相手方に対する感情とを一致するようにしむける傾向、具体的にはSのOに対する選択と、OのSに対する選択についてのS側の知覚との一致度 (3) **Accuracy** おのれに対する相手方の感情を認知する正確さ、具体的にはOのSに対する選択についてのS側の知覚と、OのSに対する実際的選択との一致度という三つの特性である。彼は互に未知な十名の成員からなる討議集団を三組作り、討議終了後、質問紙調査によって、次回討議に一緒に参加したい人を選ばせ、同時にまた誰が自分を選ぶかを予想させた。その結果を彼は確率的モデルとして創りあげたロボット集団[26]（すなわち対照集団）と比較することによって、具体的集団にみられる上記の三つの特性を明らかにしている。それによると、具体的集団にみられる mutuality に関しては牽引、反撥、無関心のいずれの選択についても、偶然（チャンス）に期待しうる以上の mutuality はみられなかった。このような結果は、集団において取交される牽引ならびに反撥の選択はある集団内の特定の人人に集中する傾向があるというソシオメトリー的事実からすれば当然なことである。たとえば多くの者から牽引選択を受けたスターは、それらの選択にいちいち返送的選択をおこなうことはなく、やはり他のスターに選択を向けるというのが普通の傾向である。つまりリーダの存在は集団内の mutuality の値を低めることになる。このことから、集団の凝集性や統合性を相互選択の点だけから決めることには疑問がある。むしろニューカムの考えているように、相互補足的なさまざまな役割に関する期待の mutuality という点から集団の凝集性あるいは統合性を測る方が適切であろう。congruency に関しては、索引反撥のいずれの選択についても偶然（チャンス）をはるかに上廻る値を示した。つまり自

分が選択した相手方から自分も選択されると予想し、自分が拒否した相手方から自分も拒否されると予想する傾向がかなり強くみられた。無関心についてはこのような傾向はあまりみられなかつた。タギューリ達は、このcongruencyについての心理学的過程はいままで深くつつこんで究明されていないし、自分達のデーターもこの問題についてなにも解答を与えていないが、これに関するいくつかの合理的な仮説は考えられるとしている。そして牽引的選択については、人がある人を選んだとき、その人から自分も選ばれると知覚することは、自分が嫌われていると思ういやな感情から自分をかばうことになる。また、人によつては相手方が自分を好いてくれるから自分も返送的に相手を選択するといつた具合に反応するなどの点を挙げ、拒否的選択については、人は相手を拒否した罪から解放されようとして、自分も相手方から拒否されていると知覚する。また、ある人は、相手方が自分を拒否するだろうと知覚したからその返送として自分も相手を拒否するなどの点を挙げているが、このようなcongruencyに関する心理的ダイナミックについての体系的研究は今日までほとんどこころみられないようである。さて、もう一つの特性accuracyに関しては、牽引的選択の知覚については偶然以上の正確さが認められたが、拒否的選択と無関心の知覚については偶然以上の正確さは認められなかつた。タギューリ達は、牽引的選択の知覚には偶然以上の正確さが認められながら、拒否的選択の知覚にはそれが認められない理由として、(1) 通常礼儀上拒否の感情はあまり表面に現わされないからそれを知覚しにくい。(2) 人間には自然といやなものは知覚しまいとする自己防禦のメカニズムが働くため、拒否的選択は知覚されない。(3) われわれは小さいときから拒否的態度を認知するような機会にあまり恵まれてこないなどの点をあげているが、これらの点についても体系的な研究はみられないようである。

以上のようにタギューリ等は、ロボット集団との比較において具体的集団にみられるMutuality, Congruency,

第四図　mutuality, congruency, accuracy の関係



Accuracy の三つの特性を明らかにしたが、さらに一歩深くつき進んで、これらの特性相互間の関係をも究明した。すなわち第四図に示すように、これら三つの特性は論理的には相互依存の関係にあり、三者のうち二つが規定されれば他の一つはおのずと決まつてくる。このことから accuracy を他人の感情を正しく評価した結果と考えずに、mutuality と congruency の副産物と考えることが可能となり、同様に congruency を mutuality と accuracy の副産物と考えることも可能となる。このような理論的図式から出発して、彼等はその図式が果して具体的集団の選択行動ならびに選択予想行動において妥当性をもちうるかどうかをロボット集団との比較において検証し、つぎのような結果を得ている。

(1) mutuality は accuracy の函数でもあり、congruency の函数でもある。すなわち、accuracy がプラスのときは（相手の選択の予想が適中しているとき）、mutuality の数は偶然(チャンス)以上となり、accuracy がマイナスのときは（相手の選択の予想がはずれているとき）、偶然以下となる。一方、congruency のプラスのときは（自分の相手に対する選択と相手から自分に向けられる選択の予想とが一致するとき）、mutuality の数は偶然以上となり、congruency がマイナスのときは（自分の相手に対する選択と相手から自分に向けられる選択の予想とが一致しないとき）、偶然の段階にとどまる。(2) congruency は mutuality の影響もまた

accuracy の影響も受けない。これはまつたく独立的に変化する。(3) accuracy は mutuality の函数であるが、congruency の函数ではない。すなわち、mutuality がみられるときは accuracy の度合は偶然以上になり、mutuality がみられないときは偶然の段階にとどまる。また congruency のプラス・マイナスにかかわらず、accuracy はいつも同じ程度に偶然以上の正確さを示している。

以上において、タギューリがブルンナーとブレークの協力のもとにおこなつた知覚的ソシオメトリーの実験的研究を紹介したが、この実験は、単に予想の選択を質問紙の中に加えたというだけでなく、普通の選択と予想の選択とを巧みに融合することによつて、選択行動の奥にひそむ心理的ダイナミックスに鋭いメスを入れたという点がこれまでの研究と較べて著しく優れた点といえよう。タギューリはさらにこの考えを発展させ、相手から自分に向けられる選択の予想のほかに、自分以外の他の成員同志の間に取交される選択の予想もまた個人の選択行動に大きな影響を与えるという点に着目し、この点を考慮に入れて新しい型の関係分析を行つた。[27] その結果、(1) congruency が、おのれに対する相手方からの選択の予想と、その相手方に対するおのれの選択との間に認められると同様に、他者同志によつて取交される選択の判断にも、あるいはまた、ある他者が他のもう一人の他者に向ける選択と、その相手からの選択予想の判断との間にも認められることがわかつた。すなわち、ある個人Sは、一人の他者O_1が他のもう一人の他者O_2を選択していると予想するとき、彼はまたO_2もO_1を選択すると予想する傾向があり、また、ある個人Sは、一人の他者O_1が他のもう一人の他者O_2を選択すると予想すると同時に、O_1はO_2から選択を受けると思つていると予想する傾向があるということが明らかにされた。(2) 人人は他の成員同志の間で現実に取交される個個の選択を適確に予測しており、また、他の成員の人気（すなわちソシオメトリック・ステータス）についても適

確な予測をしているということが明らかにされた。さらにこの研究結果が示してくれる他の重要な点は、いくつかの集団を成員がたがいに未知なる状態から知己の状態になるまで追いかけながら研究し、その集団内の mutuality・congruency・accuracy の傾向にあまり変化がみられなかつたことを報告している点また、海軍部隊、サンマー・キャンプ、ゼミの研究グループ、準治療集団など種類の違つた集団を数多く研究し、あらゆる集団において、mutuality・congruency・accuracy にほぼ同じような傾向が認められたことを報告している点である。

さて、上述のようなタギューリの研究と多少毛色の変つた研究に、オースベルのおこなつた一連の研究がある。[28] 彼の研究は社会的共感性(sociempathy)という概念から出発する。彼はこの概念を「社会的共感性とは、社会的知覚の一形式であり、それはおのれが所属する集団におけるおのれ自身ならびに他の諸成員のソシオメトリック・ステータスに関する各個人の認知を云う」[29]と定義している。この定義からもうかがわれるように、彼の研究対象は各成員の間に取交される個個の選択の認知ではなく、自分または他の成員のソシオメトリック・ステータスの認知である。この点がタギューリ達の研究と大いに異る。だがソシオメトリック・ステータスの認知の研究は、べつに彼から始まつたというわけではない。それ以前にも、モレノ[30]やボニー[31]やグロンルンド[32]などによつてこの種の研究は進められていたが、彼等の研究はいずれも生徒達のソシオメトリック・ステータスを先生が評価するといつた類の研究で、それは集団外部の第三者からの評価であつて、集団成員みずからの評価を扱つた研究ではなかつた。集団成員がみずからなすソシオメトリック・ステータスの評価を扱つた草分けの研究としてはスィンガーの研究があげられよう。[33] 彼は、心理学専攻の大学院学生十二人に、各自、自分の好きな順に従つて他の十一人を列挙させ、同時に他の十一人の者が集団成員全員をどのように序列したかを予想させた。そして、他者が自分に対し実際におこなつ

た序列と、自分が予想したおのれについての序列との一致度をもつて社会的共感能力の尺度とした。かくて彼は、この実験の結果として、個人の人気度（すなわちソシオメトリック・ステータス）と集団内の自分の地位を予想する社会共感能力との間には著しいマイナスの相関がみられることを報告した。だがこの研究は、自分自身のソシオメトリック・ステータスの予想の分析にのみとどまつて、他者のソシオメトリック・ステータスの予想についてはなんらの分析もおこなわなかつた。オースベルはこれをもう一歩前進させた。彼は各個人が他の集団成員から受けた評価値の平均値（すなわち、彼の実際のソシオメトリック・ステータス）と、他の成員が自分に与えるだろうと考えた予想評価値の平均値との相関値をもつて、その集団内のおのれのソシオメトリック・ステータスに関する共感能力とし、また、各個人が他の集団成員から受けた評価値の平均値と、その個人の評価値に対し他の集団成員がおこなつた評価予想値の平均値との相関値をもつて、その集団内の他者のソシオメトリック・ステータスに関する共感能力とした。そしてその結果を年令の異るいくつかの集団について調べたところ、(1) 両者の相関値はいずれの集団においても偶然以上の高い値を示していた。(2) おのれのステータスの認知よりも、他者のステータスの認知の方がどの集団においても高い値を示していた。(3) この社会的共感能力は、両者とも年令の増加とともに良くなつていつた。(4) 性別にわけてこの社会的共感能力をみてみると、自分のステータスに対する共感能力については、男女とも年令の発達とともに一時悪くなるが、その後再び良くなつてくる。他者のステータスに対する共感能力については、男の子は年令とともに良くなつてゆくが、女の子は青年期に入る直前に一時悪くなり、その時期が過ぎるとまた良くなつてゆくなどの諸事実が明らかとなつた。

さらにオースベルは、この社会的共感性とソシオメトリック・ステータスとの関係にも着目し、ソシオメトリッ

ク・ステータスの高い人ほど社会的共感能力が優れてはいないだろうか、また、ソシオメトリック・ステータスの高い人が他の成員に対しておこなう評価ほど他の成員によつて認知されやすいのではないだろうかの二点について分析を進めた。まず彼は次の三つの変数を考えた。すなわち、(1) 自分自身のソシオメトリック・ステータスについての認知能力（他の成員Oによつて、ある個人Sに実際に与えられた評価値と、Sがその成員Oならば自分をかくかくと、評価するだろうと予想した予想評価値との差の絶対値の平均）(2) 他の成員のソシオメトリック・ステータスについての認知能力（他の成員Oの実際のソシオメトリック・ステータスと、ある個人Sがその成員Oについておこなつたステータスの予想値との差の絶対値の平均）(3) 自分の現実のソシオメトリック・ステータス（他の諸成員によつて与えられた評価値の平均）の三つの変数がそれである。そしてこの三つの変数をもととした分析を進める事によつて、(1) 全体的にみてソシオメトリック・ステータスと社会的共感能力との間には有意な関係がみられない。(2) ある個人Sのソシオメトリック・ステータス、およびその個人Sが他の成員に対して抱いているソシオメトリ的態度（この場合、好きという点に関する評価値）が他の成員によつて正しく知覚される度合は、いずれもその個人Sのソシオメトリック・ステータスとおおいに関係がある。すなわちソシオメトリック・ステータスの高い人ほど、他人によつてその地位を正しく評価されやすく、同時にその人の他者に対する態度も正確に知覚される傾向がみられるなどの事実を明らかにした。

以上において、集団内におけるおのれまたは他者のソシオメトリック・ステータスの認知能力、すなわち社会的共感能力を取扱つたオースベルの研究を要約的に紹介した。タギューリ流の mutuality・congruency・accuracy に関する研究や、オースベル流の社会共感性に関する研究は、なんといつても知覚的ソシオメトリーの主流をなす

ものであるが、この流れとは多少はずれてそこにもう一つの流れがみられる。フィードラ[34]、ダヴィッ[35]、ルンディー[36]等によつておこなわれている一連の研究がその流れに属する。これらの研究は他者のパーソナリティの知覚とソシオメトリー的変数（主としてソシオメトリー的選択）との関係を明らかにすることを目的としている。それはあくまでも他者のパーソナリティの知覚を扱つた研究であつて、ソシオメトリー的事実に関する知覚（たとえば相手の選択やステータスの知覚）を扱つた研究ではない。ただパーソナリティの知覚をソシオメトリー的変数と関係させたというにすぎない。したがつて、この研究は厳密には、知覚的ソシオメトリーと呼ばれる種類のものではなく、むしろ前述のダウィンやピダリット以来のパーソナリティー知覚判断に関する研究の流れに属するものといえるだろう。

さて、この流れに属する研究のサンプルとして、ダヴィッによつておこなわれた研究を簡単に紹介してみよう。この研究のおもな目的は (1) パーソナリティの知覚上の類似性とソシオメトリー選択との関係 (2) パーソナリティの実際上の類似性とソシオメトリー選択との関係、(3) 知覚上の類似性と実際上の類似性との間にみられるずれとソシオメトリー的選択との関係とを検討することにあつた。調査方法としては、まずサンマー・キャンプの子供に、一緒の小屋に住みたい相手、パーティに招待したい相手を選ばせる。ついで二十項目よりなるキャンプ活動に関するインヴェントリーを配り、各項目について、(a) 自分自身の好み (b) 自分が最も好きな相手の好みについての予想 (c) 自分が最も嫌いな相手の好みについての予想をそれぞれ記入させる。そしてパーソナリティの知覚上の類似性を、インヴェントリーに対する自分自身の反応と、彼が好きな相手、嫌いな相手の好みについておこなつた予想との間の一致度で表わし、また、実際上の類似性を、彼自身の好みと相手方自身の実際の好みとの間の一致度で表わした。ダヴィッはこのような諸変数をもとに分析をおこなつた結果、つぎのような事実を明らかにしている。

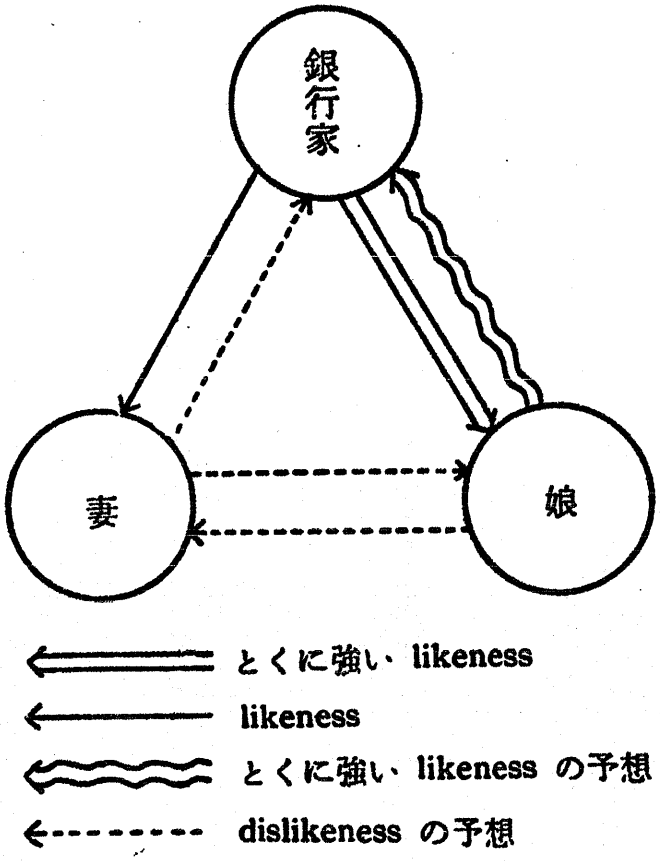
(1)自分が好きな人についてのインヴェントリーの予想は、自分が嫌いな人についての予想よりもおのれの反応に近いように予想する傾向がみられる。(2)自分の好きな人については、その人が実際におこなつているインヴェントリーの評価よりもはるかにおのれの反応に近いように予想する傾向がみられる。(3)かようにインヴェントリーにおける知覚上の類似性と、ソシオメトリー的選択（すなわち好き嫌い）との間に積極的な関係がみられるのは、各人がおのれの好きな人に似ているようになりたいとする要求の現われである。(4)自分が好きとして名をあげた人が実際におこなつている反応と、自分自身の反応との間の類似度は、自分が嫌いとして名をあげた人の実際上の反応と、自分自身の反応との間の類似度と比較して大差はなかつた。(5)自分が嫌いな人については、その人が実際上おこなつている反応と、自分自身の実際の反応との間にみられる差異以上に、その人の反応をおのれの反応からかけはなれたものとして予想するような逆の傾向はみられなかつた。

以上、知覚的ソシオメトリーとはどんなものか、またその研究方向はどんな問題に向けられているかを明らかにするために、この領域で主要な研究方向と思われるいくつかの流れからそれぞれ代表的な研究を選んで簡単な紹介をこころみた。だが、知覚的ソシオメトリーにはもう一つ見落すことのできぬ研究方向がある。最後にこの研究方向について略述してみよう。

ソシオグラムに投射された個人の社会的アトムならびに集団の網状組織（ネットワーク）の分析から、個人の集団内における立場を発見し、彼の集団への適応、不適応を診断すること、さらにその診断書にもとずいて適切な治療をほどこし、彼の集団への適応を円滑ならしめるといつた研究は、すでに革命的ソシオメトリーの時代からこころみられてきた。ところが、知覚的ソシオメトリーの発達にともなつて、新しく予想選択という変数が導入され、それがもつ心理

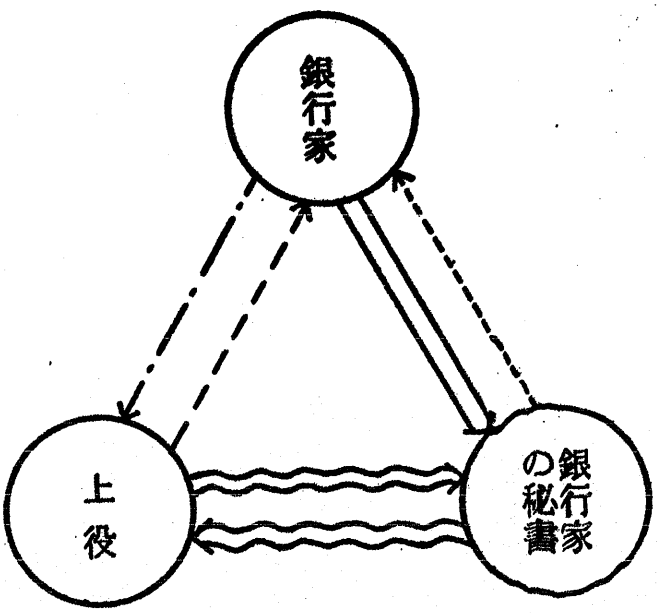
的ダイナミックスが探究されてくるにつれ、個人の社会的アトムならびに集団の網状組織の分析の精密化にとり、予想選択が欠くことのできぬ重要な変数であることが明らかとなつてきた。そこで、従来の選択にこの予想選択を加味して、個人の社会的アトムならびに集団の網状組織を分析し、それにもとずいて、個人ならびに集団により効果的な治療をほどこそうとする研究が近年ぼつぼつ現れてきた。たとえばモレノはつぎのような研究例を紹介している。[37] かつてモレノのところへ一人の銀行家がカウンセリングにやつてきた。会つてインターヴューをこころみたが、なかなかこれに応じない。心理劇の舞台にのせて彼の相談にきた問題を演じさせようと思つても、これを拒否してしまう。そこで仕方なく、モレノは予想選択の分析法の適用をこころみた。「これは誰もいないところで、あなた一人でできる方法です」といつて、その方法を説明すると、この銀行家はやつと興味を示してきた。そこでモレノは「あなたの勤めている銀行の月次報告を吟味し分析すると同じように、あなたのソシオグラムを作つてごらんなさい。」と、まず家族のソシオグラムを作成させた。彼が妻に対しどんな感情を抱いているか。逆に妻は自分に対してどんな感情を抱いているだろうか。娘についてはどうか、娘と妻との間はどう

第五図　ある銀行家の作成した家庭におけるのソシオグラム



かなどを聞き正すことによつて、第五図のようなソシオグラムが出来上つた。これについでこんどは同じように、彼の銀行におけるソシオグラムを作成させ、第六図のようなソシオグラムがえられた。この図に画かれた二人の人以外は、彼のソシオグラムに掲示されなかつた。つまり、このソシオグラムは、彼がいかに職場において孤立した存在であるとみずから信じこんでいるかを示している。この二種のソシオグラムからもうかがわれるように、彼の人間関係の予測にはかなり被害妄想的なところがみうけられた。そこでモレノは三ヶ月に一度づつ彼を訪問させ、そのつど以前に画いたソシオグラムを再検討させるとともに、実際の人間関係を正確に認知できるようにさまざまな指導をほどこし、また彼の現在のステータスをいかに改変したらよいか、現在彼がどういう行動をとるべきかなどについて示唆を与えた。かくて時がたつにつれて、彼の社会的知覚も正確性を増し、同時に被害妄想からも解放され、彼はおのれを適切にコントロールできるようになつていつた。

第六図　ある銀行家の作成した職場におけるソシオグラム



とくに強い likeness
dislikeness
とくに強い likeness の予想
無関心の予想
dislikeness の予想

以上、知覚的ソシオメトリーの特質を明らかにするために、この領域に属するいくつかの主要な研究方向をごく簡単に紹介してみた。この領域はある意味では今日のソシオメトリー研究の焦点であり、ここにあげられた研究以外にもさまざまな

研究が数多くこころみられている。しかし、この領域はまだまだ未発達な段階にあり、今日までのところでは、人間関係の科学に対しさほど大きな貢献を果しているとは思えない。だが、予想選択という変数の導入が人間関係の分析にとつてかなり有力な武器となることは疑う余地がない。とくに選択行動の奥にひそむ心理的ダイナミックスを探究するためには、欠かす事のできぬ有力な武器といえよう。そういう意味で、人間関係の研究に従事する多くの人々から今後の発展におおいに期待がかけられてもしかるべきである。

(1) Moreno, J. L. Old and new trends in sociometry: Turning points in small group research. *Sociometry*, 1954, 17, pp. 179～193.
(2) Moreno, J. L. ibid., *Sociometry*, 1954, 17, p. 186.
(3) Moreno, J. L. The birth of a new era for sociometry: Derected to the occasion of the transfer of sociometry to the American sociological society. *Sociometry*, 1955, 18, p. 261 (p.8.)
(4) Moreno, J. L. ibid.,*Sociometry*, 1954, 17, p. 187.
(5) 佐野勝男、関本昌秀「ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題(その一)——モレノのソシオメトリーの背後にあるもの」哲学第三十五集慶応義塾創立百年記念論文集 昭和三十三年 五一六—一五七頁参照
(6) Moreno, J. L. Who shall survive? (revised), 1953, pp. 219～547.
(7) Moreno, J. L. Changes in sex groupings of school children in *Readings in social psychology* (revised), ed. by Swanson, G. E., Newcomb, T. M. & Hartley, E. L., 1952, pp. 266～271, or Moreno, J. L. Who shall survive? (revised), 1953, pp. 127～215.
(8) Moreno, J. L. ibid., (1953) p. 240.
(9) モレノは、Foundations of sociometry, *Sociometry*, 1941, 4, pp. 15～30 ならびに Contributions of sociometry to research methodology in sociology. *Amer. Social. Rev.*, 1947, 12, pp. 287～292. において、これまでの研究結果から次のような三つの主要な法則が導き出されるとしている。
社会力学的法則(sociodynamic law) 集団内で成員が行ふ選択は、集団の大きさや種類に関係なく、いつでも各成員の間に不均衡にばらまかれる。すなわち何人かの人は人気者として集団内で取り交された選択の大部分を受け、逆に何人かのくの人が、全然選択を受けない状態のままにとどめられる。いま縦軸に人数、横軸に被選択数をとつてこれを図示するとJ型曲線を呈する。また成員の人数を殖したり、あるいは一人当りの選択数を殖したりして、選択を受ける機会を多くし

たとしても、やはりそれに比例して、スターに向けられる選択は多くなり、選択を多く受ける者とほとんど受けないものとの溝はますます大きくなつてゆく。このように、この法則は人間集団の内的中核構造にステータス、ハイラルキーが必然的に存在することを述べている。

社会発生の法則 (sociogentic law)　モレノはセンタービリと名付けられたコミュニティーにおける集団進化の研究と、幼児から十四才にわたる各年令層の児童の集団形成と集団進化に関する研究とから、この法則を導き出した。この法則は、集団の内的中核構造（自発性にもとずいて形成された集団構造）は集団機能の分化にともなつて、また集団成員の知性感情の成熟にともなつて最も単純な形からますます複雑な形へと進化してゆく、したがつてある社会、ある集団の構造がいかに分化し、特殊なものに見えようとも、いずれもこのような進化のなりゆきに従つてきたのであるということを述べている。

社会的重力の法則 (law of social gravitation)　これは二人の人間（または二つの集団）$p_1 \cdot p_2$が位置している場所の物理的距離が等しく、両者の間のコミュケーションの便宜が等しい場合、両者は、お互いに交し合つた牽引の量に比例して、また反撥の量に反比例して合い寄ろうとする傾向があるということを述べた法則である。

これらの法則をみてみると、そのあるものは自明の理的な法則であり、あるものは一般法則 (genelal law) と名付けるには、まだまだ深くつき進んだ研究と豊富な資料とが必要であるように思える。またモレノは、「誰が生き残るか」（改訂版一九五三年）の中の「一般仮説と今後の研究への勧告」（六百九十六頁――七百二十三頁）と称する章においてこの他にもさまざまな仮説を述べているが、その多くは自明の理的仮説であつたり、検証不能な仮説であつたり、あるいは一般的仮説と呼ぶには早熟すぎる仮説であつたりしている。

(10) Moreno, J. L. ibid., (1953) pp. xxxii～xxxiii.
(11) Moreno, J. L. A plan for the re-grouping of communities. *Sociometic review* 1936, pp. 58～61.
(12) Wolman, S. Sociometric planning of a new community. *Sociometry*, 1938, 1, pp. 220～254.
(13) Moreno, J. L. ibid., *Sociometry* 1955, 18, p. 264 (p. 8)
(14) Moreno, J. L. Progress and pitfalls in sociometric theory. *Sociometry*, 1947, 10, pp. 268～272.
(15) 佐野勝男、関本昌秀、前掲（昭和三十三年）第二節㈠ソシオメトリーの哲学および㈢ソシオメトリーの科学的方法論を参照
(16) Moreno, J. L. ibid., *Sociometry* 1954, 17, p. 188.
(17) Moreno, J. L. ibid., *Sociometry*, 1954, 17, p. 188.
(18) 認識的テレの考想はソシオメトリー誕生の初期の頃には全くみられなかつたが、一九四二年にモレノは Sociometry in action. *Sociometry*, 1942, 5, pp. 298～315. という論文の中で、テレを、個人間に意欲的に選択を取交させる原因となる能動的テレ (conative tele) と、相手方から与えられる選択の認知を可能ならしめる認識的テレ (cogitive tele) との二種に分けることによつて、理論的にはじめてこの問題にふれている。だがこの問題が実際に操作的に取上げられるようになつたのは一九五〇年近くになつてからのことである。
(19) ブルンナー (Bruner, J. S.) とタギューリ (Tagiuri, R.) が、リンゼイ (Lindzey, G.) の編纂した Handbook of social psychology, Vol. 2, 1954 の中の The perception of people (pp. 631～654) の章において、この種の実験的研究を、他人

の情緒の認知に関する研究、他人のパーソナリティの評価の正確性に関する研究、およびこれら情緒の認知ならびにパーソナリティの印象が形成される過程に関する研究の三つに分類し、それぞれの研究につき統合的な優れた考察を行つているので、詳細についてはその論文を参照していただきたい。

(20) Maucorps, P. H. A sociometric inquiry in French Army. *Sociometry*, 1949, 12, pp. 46～80.

(21) Williams, S. B., & Leavitt, H. J. Group opinion as predictor of military leadership. *J. consult. psychol*, 1947, 11, pp. 283～291.

(22) Lundberg, G. A. & Dickson, L., Inter-ethnic relations in a high-school population. *Amer. J. Soc*, 1952, 58, pp. 1～10.

(23) Tagiuri, R. Relational analysis: an extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 1952, 15, pp. 91～104.

(24) 理論的には $\sum_{i=0}^{i=8} M_i C_8 = 256$ 通りの関係が考えられるが、同一人間を選択しかつ拒否するようなことは現実に起り得ないから（相手の選択の予想の場合にも云える）これらの点を修正すると、まつたく結びつきのない場合を除いて81通りの結合関係が考えられる。

(25) Tagiuri, R., Blake, R. R., & Bruner, J. S. Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *J. abnorm soc. psychol.*,

(26) 彼は、ルース（Luce, D.）、マースィー（Macy, J. Jr.）の助けを借りて、次のような性質をそなえた確率モデル集団を創つている (1)集団の成員は自動人間として考えられ、調査対象となつた現実集団において取交された牽引・反撥・無関心の総数と同じ数だけ、集団のあらゆる成員をランダムに選ぶものと考える (2)ある個人によつてなされるいろいろな種類の選択（牽引・反撥・無関心）と予想選択との間は独立的と仮定する (3)ある個人のおこなう選択ならびに予想選択は他の成員のおこなう選択ならびに予想選択から独立的であると仮定する (4)各個人は一度以上同じ人を選択したり、あるいはまた予想選択したりしない、つまりこのモデルは、選択や予想選択の頻数を支配する要因以外はいかなる心理学的要因も除去するように作られている。なおこのモデルの構成法について詳しくは Luce, R. D., Macy, J. & Tagiuri, R., A statistical model for relational analysis. *Psychometika*, 1955, 20, 319～327; or Tagiuri, R., Bruner, J. S., Kogan, N., Estimating the chance expectancies or dyadic relationships within group. *Psychol. Bull.*. 1955, 52, pp. 122～131. を参照されたい。

㉗ Tagiuri, R. Social preference and its perception, in *Person perception and interpersonal behavior*, ed. by Tagiuri, R. & Petrullo, L., 1958, pp. 316～336.

㉘ Ausubel, D. P., Schiff, H. M. & Gasser, E. B. A preliminary study of developmental trends in sociempathy: Accuracy of perception of own and others' sociometric status. *Child Development*, 1952, 23, pp. 111～28., Ausubel, D. P. Reciprocity and assumed reciprocity of acceptance among adolescents, a sociometric study. *Sociometry*, 1953, 16, 339～348. Ausubel, D. P. & Schiff, H. M. Some intrapersonal and interpersonal determinats of individual defferences in sociempathic ability among adolescent. *J. abnorm. soc. psychol*, 1955, 41, pp. 39～56. Ausubel, D. P. Sociempathy as a function of sociometric status in adolscent group. *Hum. Relat.*, 1955, 8, pp. 75～87.

㉙ Ausubel, D. P. ibid, *child development*, 1952, pp, 111

㉚ Moreno, J. L. Who shall survive (revised) 1953.

㉛ Bonney, M. E., The constancy of sociometric scores and their relationship to teacher judgement of success and to personality self-rating. *Sociometry*, 1943, 6, pp. 409～424. Bonney, M. E., Sociometric study of agreement between teachers' judgement and student choice. *Sociometry*, 1947, 10, pp. 133～446.

㉜ Gronlund, N. E. The accuracy of teachers' judgement concerning the sociometric status of six-grade pupils. *Sociometry*, 1950, 13, pp. 197～225 & 329～357.

㉝ Singer, E. An investigation of some aspects of empathic behavior. *Amer. psychologist*, 1951, 6, pp. 309～310.

㉞ Fiedler, F. E. Warrington, W. G., & Blaisdell, F, J. Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *J. abnorm. soc. psychol.*, 1952, 47, 790～796. Fiedler, F. E. The psychological distarce dimension in interpersonal relation. *J. Pers.*, 1953, 22, 142～150. Fiedler, F. E., Assumed similarity measures as predictors of team effectiveness. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1954, 49, 381～388.

㉟ Davitz, J. R. Social perception and socimetric choice of children. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1955, 50, 173～176.

㊱ Lundy, R. M., et al. Self acceptability and description of sociometric choice *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1955, 51, 260～262.

㊲ Moreno, J. L. ibido, *Sociometry*, 1954, 17, p. 179～193